日中文化交流

日本中国文化交流協会編集　No. 545　1994. 8. 1

日中関係の「過現未」所感

北京大学日本文化研究所顧問
評論家
加藤周一

遠い過去の事

今日の日本文化の源を尋ねて歴史をさかのぼると、ほとんど常に中国文明に行きつきます。水田耕作から、文字を通って、価値観まで。日本文化史は中国文化の影響の内面化の歴史です。その影響の特徴は、それがほとんど純粋に文化的であって、軍事的征服や政治的支配に伴って生じたのではない、ということです。

要するに歴史的日中関係は、「武器なき文化」の関係です。その内容を知ることは、殊に日本の若い人々にとって、自分自身を知ることになるでしょう。

近い過去の事

日本の中国侵略戦争は、「文化なき武器」の活動でした。日本側からの中国文化への寄与はほとんどなく、日本による中国の人命文物の破壊は膨大でした。その過去は水に流すことができず、日本側で責任をとるべきはずのものです。しかも敗戦後、米中接近（一九七一）まで、日本政府が中国大陸の政府に対してとっていた態度は、冷戦の枠組みのなかで、米国の「封じ込め」政策への同調です。その責任もあるでしょう。

現在の事

経済的な日中関係は、貿易・投資・技術協力を含めて、密接です。政治的には、日本政府が、米国追随の枠内で、日中関係を良好に保つように努力しています。そういう政策は、米中の意見が対立しないかぎり容易で、対立が鋭くなるに従って困難になるだろう、と思います。たとえば対北朝鮮政策。民間の文化的交流は発展し、今では相互の留学生の数も多くなりました。これは大いに歓迎すべきことです。

しかしそれだけでは十分でない、と私は考えます。もっとも重要なことは、両国人民の信頼関係を、将来経済的摩擦や政治的利害の衝突がおこっても容易にゆるがないように、確実に築いてゆくことでしょう。そのためには、侵略戦争の責任を、たとえば日本の国会がはっきりとさせることも、一つの条件です。また戦後に生まれ、したがって過去の侵略に責任のない日本人が、侵略を生みだした諸条件のなかで今日も存続するものに対し、はっきりした責任をとることも、もう一つの条件です。戦争は過去の事件ですが、戦争を必然的にした条件の少なくとも一部は、現在の問題です。

近い未来の事

内政不干渉。その上で、相互の経済的および文化的発展のために最大限の協力が望ましい。詳細はここでは述べきれません。

遠い未来の事

中国の人口は日本の人口の十倍です。その中国が、日本型または欧米型の資源とエネルギーを浪費する消費社会への道を、どこまでも進むことはできないでしょう。そのために